

構成資産を知る(その二)

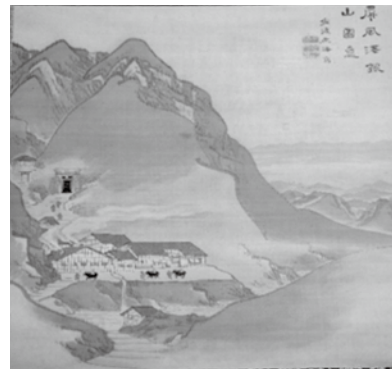
鶴子銀山

鶴子銀山は、越後国の商人であった外山茂右衛門が、佐渡に渡海した天文11(1542)年に発見したとされており、砂金山を除くと佐渡島で鉱山採掘が行われた銀山の中でも歴史が古い鉱山です。

石見銀山から導入されたと考えられる坑道掘り(横相)と灰吹法と呼ばれる鉱山技術によって、鶴子間歩や百枚間歩などの諸間歩では、銀の産出量が飛躍的に増大し、「鶴子千軒」と呼ばれる繁栄期を迎えました。



滝つぼ部分に抗口が残される大滝間歩跡



石井文海作「屏風沢銀山絵図」
(市教育委員会蔵)

このような技術は、慶長元(1596)年以降、鶴子の奥山と呼ばれる存在であった、相川金銀山の開発も容易なものとし、慶長6(1601)年、鶴子銀山の山師たちによって良質の金銀鉱脈が相川で発見されたことで、佐渡はゴールドラッシュを迎えることとなりました。慶長8(1603)年に佐渡代官に着任した大久保長安は、鶴子にあった陣屋を相川に移し、相川の道を整備したことで、鶴子の町や寺院なども相川に移転し、金銀山採掘の中心地は次第に相川へと移っていくこととなります。

産業観光部世界遺産推進課
☎ 63-5136

日本版観光DMO「佐渡観光交流機構」からのお知らせ

佐渡を日本一の観光地にするために

佐渡の観光客は平成3年の123万人をピークに年々減り続け、近年は50万人くらいに減少しています。佐渡を日本一の観光地にするために、まずは島内外の「情報」を収集し、また、少しでも観光客数を回復するために、2030年までに、島外、特に関東圏の佐渡に来れなくても佐渡を意識し、佐渡を薦めてくれるお客さま、関係人口100万人を目指します。

佐渡の文化、歴史、その風土から生まれた先人の知恵や地域の声を活かし、佐渡全体を観光地として経営する視点を持って、明るい未来を創造し、観光という既存の概念だけではない、地域の利益のためのプラットフォームとなる活動をしていきます。

また、島内の皆さまに観光交流機構の活動への関心や観光への意識をもっていただくために、佐渡の資源を掘り起こし、地域にとっての価値を高めることを約束します。

随時、活動内容をホームページ「佐渡観光ナビ」で掲載しますので、ぜひご覧いただき、皆さまのご意見をお待ちしています。

☎ 一般社団法人佐渡観光交流機構(事業本部)
(あいぽーと佐渡内) ☎ 23-5230

